

一匹獅子

子母沢寛著

一匹獅子

子母澤 寛

新作・大衆文学全集

一匹獅子

¥270

昭和31年12月20日発行

著者	子母沢寛
発行者	田中健一
印刷所	鈴屋印刷株式会社
製本所	有限会社 関川製本所

発行所 東京都千代田区 株式 同 光 社
神田佐久間町2-11 会社

目 次

三三旅三お夜箱千黄左川仕夏おく末男甘失看に三
人宿んの根本目番事街や酒組日
艇人のの並っか茶敗板の月
風のな

呂 駕 前 女 星 鳥 宿 木 昏 ち 所 場 道 ん 終 め 屋 奴 娘 鶯 痴

 壺 亼 八 亼 七 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 究 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

南郷小僧……………九
切支丹小僧……………一〇四
千本並木……………一〇八
深編笠……………一四
楯つ……………二七
笑顔……………三二
荻の句……………三五
黄瀬川橋……………三九
離れ座敷……………三三
夜の不思議……………三七
味方か敵か……………四〇
齒が立たねえ……………四四
道連……………四七
御城下……………五一
小磯切通し……………五五
六日雇取……………六〇
鬚飛ぶ……………六三
ひたち屋……………六七
詩を吟ず……………七三
忍術……………八〇
日に八十三里……………八六

御存じ江戸侍	雲の行衛	日の蔭の花	おくのれも	辻場所	拳法者	隠密	陣十郎最	禁制の万内	拾つ登	四光石	電火	名技	黒潮	寝台	女声	夜盗	蓑
.....																	
二九	二七	二六	二三	二五	二三	二九	二四	二四	二五	二三	二四	二九	二三	二八	二四	一九	一五

一
匹
獅
子

三日月疵

三月、おぼろな月が出たばかり。

江戸の街々の辻行燈つしあんどんが夜露よもやの中にぼんやりして、もう余人通りもない。

玄治店げんやだなから駕屋新道かじやへ抜けて来た一人のでつぷりとした武家が家迄は駆ける程の速足でいたのを、浜町の高砂橋たかさごばしを渡りかけてぱつと止つた。途端にうしろに喰いついていた若い男が、思わず、たたらを踏むような恰好で左脇へ前倒のめつて出たものである。

その腕を武家は逞たくましい大きな手でむずとつかんで、

「おれが神田の八丁堀を出て、ものの半刻、あつちこつちと引つ張り廻しているのに、貴様根氣よくつけていたが、一体何がほしいのだ」

武家は四十がらみ、鬢びんの濃い鋭い目つき。

「あつしは、そんなもんじやあ御座んせん」

つかまれている男はまだ廿歳そこそこ、いい男つぷりである。

「黙れつ。武家を盲目めくらにするか。うぬの風態は誰が見たとて巾着切、足の運び、眼がんの配り、こちら、おれを誰だと思つている。深川佐賀町に一刀流の師範をする大間々源兵衛。さ、何にがほしい。云え」

「あつしは、そ、そんな」

縞しまの袷あわせに寸の詰つた角帯で、乳の辺りまで胸一ぱいにきりと木錦を巻いているのが覗かれる。

「欲しい物はないのか。尤もおれは剣士だから懐中ふところは至つて淋しいがな」

と、大間々は太い馬鹿気た大声で笑つて、

「貴様に欲しい物がなくともおれがくれてやる物がある」

若い男の右の手首を左でむすつつかんで、ぐいつと手許へ引いた。男はよろよろとした。

その時はもう、近頃架換かけかえたばかりの橋の欄干らんかんへ對手が素早い業わざで、こつちの手を載せ、内側の筋すぢをねらつて、ぱつと手形を押すようにされてしまつていた。どうする事も出来ない。

「生涯の教えと思え」

大間々の抜いた小束こづかが、男の手を、ざくつと欄干へ縫いつけてしまつた。

「うむ」

男は齒を喰いしぼる。血が欄干から橋桁へたらつたらつと漏り落ちて、その音が他に人も通らない春の夜の霧の中に、妙に不気味におののき響いた。

「小束を貴様に呉れてやる。人の物を盗もうなどと思う悪心が起きた時はじつとそれを見る。またこのおれが憎いと思つたらいつでもやつて来い。恐らくは手の平に三日月疵が残るだろう、おれも貴様を忘れずにいてやる」

大間々は、それつきり、もう、うしろを振り返りもせず、幅の広い肩をゆするようにして、橋を渡ると、久松町の方へ行つてしまつた。街の角のところに辻行燈があつた。

若い男ははじめて、

「ち、ち、畜生、ひでえ事をしやがる」

と、呻くようにひとり言をいつた。思い切つて突きさされている小束をぬこうと、左の手をかけた。

「あつ、ちつちつち——痛てえ」

顔をしかめた。もう真つ青である。

丁度この時、

「おい待て、おれが抜いてやる」

何処から来たのか風のように、侍が男のすぐ脇に立つた。

「じつとしてろ。下手にじたばたすると、一生右手が利かなくなるぞ。巾着切には大切だろう」

侍は、手を延ばすと、軽くすつと突きささつた小束を抜いてやつた。と同時に、ふところ紙を若い男の鼻先へ、

「これで押さえろ——がそのままじゃあ、どんな事になるかも知れねえ。といつて、斯々と実を明かして医者へやつて行く事もあるまい。よし、おれが連れて行つてやる。黙つてついて来い」

「へい、有難う存じます」

若い男は、そういうより他に法はなかつた。眉を寄せて小きざみからだが慄えている。

「はつはつ。慄えているな。意気地のない奴だ。しつかりしろ」

侍は笑いながらも歩き出した。

「一刀流の大間々源兵衛とはお前も悪い對手に手を出したものだ。目串の利かねえところを見ると、昨今の馳出しだな」

「へえ」

「名前は何んという」

「へ」

若い男は流石にぎくつとしたようであつた。

「ああ、こ奴あ野暮をきいたつけ。名乗る事あねえよ」

に組の鳶

町名は若松町だが江戸つ子は誰もそうは云わない。呼んで犬の糞新道。その角屋敷から北の方へ門を並べて医者が三軒。その隣りに盲目の矢島検校の屋敷があつて、これが一番立派だが、反対の端つこにいる竹内元応は、自から江戸一の外科医者と名乗っている。

それがどうだ、軒が傾むくという程でもないが、板塀のところどころに大きな穴が開いて、野良犬が、魚の骨などをくわえて、勝手に出たり入ったりしている。

やがて懷紙で手を押さえて、その紙にももうべつとりと血のにじんだ若い男が、侍の尻にくつついてその門を潜つて行つた。

「おや、妙な事もある」

侍は小首をかしげてにやつとした。元応のところに、二三人、人がいて少しがやがやしているのは、こんな夜に怪我人でも運び込まれているらしい。

「おい、構わねえ上れ」

侍は若い男にそういつて、玄關からつかつかと上つて行くと、丁度、診療の部屋から出て来る人達とばつたり顔があつた。玄關に裸の百目蠟燭がぼかぼかともつてゐる。

出て来た人達と、侍がばつたり顔が合つた。

「ああ、先生」

「何あんだ、お前達か。また喧嘩をやったか」

「辰の野郎が、ちよつと真額みけんをやられやしてね。何あに猫に引つかかれた程の疵きずなんだが、辰と来た日にやあ、大袈裟おおげさな野郎だから」

「先生、猫に引つかかれたどころか、四針も縫ったんですよ」

と、頭から額へぐるぐる縋ほうたい帯をした辰十が泣きべそでそんな事をいつたが、云つてゐる程に案外苦しくは無さそうであつた。

「對手あ何んだ」

と、侍。

「何あにね、柳原の夜鷹よたかの女の生血をすつてやがる乞食見てえな奴らだが、この辰の奴が、止せばいいのに飛んだところで文句をつけたのが元で、喧嘩になり、對手あ千住の小塚こづかつ原はらで死人を扱つてゐる奴なんかを大勢つれて来やがつて、馬喰町の肴店さかなだなの当り屋で一ぺえやつて歸りかけたところを不意に襲つて来やがつた。何しろ、薄汚ねえ奴らだからこつちは最初はなから對手にせず、まあ云わば当らず触らずに扱つていたところ、そつちこつちの暗くらがりに菰こもをかぶつて臥ねていた奴が、どうですえ先生、脇差とすなんぞをふり廻して不意に飛出して来やがつて、こつちは思わず不覚をとりやした」

兄イ株らしいのが頭をかいて苦笑した。四人揃つて一番に組の鳶とびの者。近くの薬研堀の頭取三右

衛門のところにいる若いものだ。兄イ株は纏持まともちの伊三郎。

「鳶とらの者はな、草鞋わらじのまま、神仏まづをお祀りしてあるどんな屋敷の屋根へでも上るといふ清浄な渡世だ。そんな得態の知れぬ奴らを相手に喧嘩けんかなどをする馬鹿があるか」

「へえ、すみません」

「とは云うが、こつちも武家の巾着きんちやくをすり損ねて橋はしの欄干らんかんに小柄こづかを縫いつけられた怪我人をつれて
いるのだ。話あ後できく」

「ほう」

とみんな、薄暗い灯の下から一斉に若い男を見て、

「失敗とじをやつたな」

と、しかし同情の目なざしで、

「尤も御同様だがな」

と、笑つた。

「先生、辰の野郎はね、火がかりは滅法威勢はいいが、喧嘩けんかというと必らず負けやがる。考かんげえて
見ると辰十だなんて間の抜けた半端な名前がいけねえのだ。辰五郎と改めると云つてゐるんですよ」

「辰、辰五郎の方が威勢がいいではないか」
侍は、辰十を見乍ら、

「若いこつちへ来い」

奥へ行こうとしたら、

「いい江戸つ子が乞食と喧嘩をしやがつて、怪我をしやがつた奴が来たと思つたら、今度は巾着切か。碌な事あねえや」

六尺豊か、廿五貫と自慢にする蘭法医者の竹内元応、頭を青々と剃つて、まだ春というに、額に汗をかいてぬうーつと出て来た。

「何処の奴かは知らないが、これきり、片輪にするも可哀そうと連れて来た。診てやつてくれ」

侍は余つ程親しい間柄のようである。

「よし、こつちへ来い」

「へえ」

若い男は治療室へ連込まれる。寝台があつて漢法とは違つた薬の棚が並んでいる。

「痛てえなんぞとぬかしたら手当はしねえぞ」

「へえ」

「貴様、運のいい奴だな。あの男に助けられなければ、日本一の竹内元応に疵を診ては貰えなかつたぞ」

元応は疵を診た。